成長する学校図書館をめざして
～先生との協働実践～

相模原市立上溝中学校　中塚　ゆり子

Ⅰ　はじめに
１　学校図書館に求められること

学校図書館は「（前略）学校教育に必要な資料を収集し、整理し、及び保存し、これを児童又は生徒及び教員の利用に供することによって、学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる（後略）」（第二条）と学校図書館法（昭和 28 年公布）で記されている。

この目的を達成するために、『資料集子どもの読書推進 学校図書館の整備充実に向けて』[1]では、学校図書館の目的や役割が以下の３つの機能を持っているとまとめている。

・各種資料やメディアなどを収集、保存して、必要に応じて提供し、学習を支える「学習センター機能」

・多くの情報源の中から必要な資料を探し、そこから有用な情報を引き出し、評価検討し、自分なりの考えを組み立てる情報リテラシーや活用能力を育成する「情報センター機能」

・自分の好きな本、趣味の本などを自由に選び、読書の楽しみを味わう「読書センター機能」

さらに、学習指導要領[2]では、学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する、と明記された。

２　今よりステップアップ

相模原市では、平成９年から図書整理員が小中学校全校に配置され、図書館の環境整備は進んできた。生徒や先生が本を探しやすいように、日本十進分類法で配架され、どこに本があるか、分類（歴史・地理・芸術・文学など）を表示している。希望する本が自館にあるか調べられるように、蔵書はデータベース化もされている。しかし、学校の教育課程の展開に寄与し、３つの機能を充分発揮しているか、と問われれば、イエスとは言い難い。歴代の図書整理員が整備してきた環境とコレクションを生かした図書館を活用し、そこからステップアップして、生徒の読みたい、知りたい気持ちに応えるにはどうすればよいのだろう。他校の図書館実践報告会や外部の講習会・研修会に参加、学校図書館開拓の文献を読んでいた時、「10 分からできる授業支援」（学校図書館問題研究会全国大会）[3]や『学校図書館発　育てます！調べる力・考える力』（遊佐幸枝著）[4]に出会った。

「10 分からできる授業支援」は、2011 年学校図書館問題研究会第 27 回兵庫大会で、島根の学校司書がおこなった実践だ。授業で使える学校図書館を目指し、研究してきたことを、授業導入でどのように行なったかを実演してくれた。とても参考になったが、知識と経験を多く持つ島根県の学校司書だから出来る取り組みだった。

一方『学校図書館発　育てます！調べる力・考える力』には学校図書館機能の６つの

到達段階が示されている（図１）。この６つのステップなら、段階を追って私でも出来ることがあるかもしれない。勤務校は③までは到達していると思われる。ただ、③から④へのステップアップは先生方の図書館への理解と協力なしには出来ない。その壁はかなり高いものに見えたが、一歩ずつ前に踏み出していけたらと考え、ここ４年、さまざまな取り組みをしてきた。

読書センターとして、中学生が離れがちな読書に興味を持ってもらえるように、学習情報センターとして、少しでも授業で活用されるように、前任校の大野台中学校（勤務当時約 400 名、1,2,3 年各 4 クラス、特別支援学級）、現勤務校の上溝中学校（約 900 名、1,2,3 年各 8 クラス、特別支援学級）で先生方と協働しながら行った実践をここにまとめる。

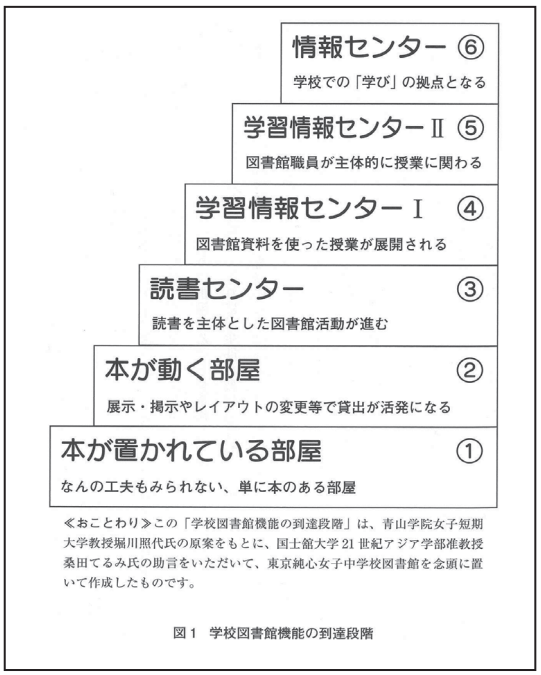

図１　学校図書館機能の到達段階 [5)]

Ⅱ　読書センターとしての実践

１　校長先生の読み聞かせライブ

中学校では、朝読書を授業の前に行うものの、小学校から培ってきた読書の習慣がぷっつり途切れてしまう生徒が多い。心を豊かにする読書を継続していくことは、今の中学生にはとても必要だ。幅広い読書をどのように楽しんでもらおうか、試行錯誤していた。そんな時、前校長先生が「昼休みに読み聞かせをしましょう」と提案してくださった。読む本は、初めての試みだったので、中学生でも楽しめて、ゆったりとしたお話『ルリユールおじさん』（伊勢英子著）[6)]。普段昼休みには 70～80 人が来館する。多くの生徒が見られるように、大型テレビに絵本を映し出すようにした。先生の読むタイミングに合わせて、うまく画面を変えていくように、事前に何回か校長先生とリハーサルを行った。当日の会場設営は図書委員が協力してくれた。

いつもと雰囲気の違う図書館に来た生徒は驚きを隠せない。「読み聞かせなんて小学生みたい」「興味ないし」と消極的だった生徒も、校長先生に「まぁまぁ、聞いてみようよ！」と勧められ、とりあえず着席した。それでもお話が始まると、どんどんその世界に引き込まれ、とても楽しそうだった。

写真１　読み聞かせのようす（大野台中学校）

昼休み終了後、校長先生と「中学生にも他読は心地よく、彼らにとって必要な時間だ」と改めて認識し合った。実際、全国学校図書館協議会の調査結果 [7)] でも教師の読み聞かせを「好き」「どちらかといえば好き」と答えた中学生は男子 49.0%、女子 74.2%と、多くの生徒が好意を持っている。

大野台中学校での先生による「読み聞かせ」はその後、前校長先生『３びきのかわいいオオカミ』（ユージン・トリビサス著）[8)]、前教頭先生『だいじょうぶだいじょうぶ』（いとうひろし著）[9)]、ALT と整理員２カ国語での『そらいろのたね』（中川李枝子著）[10)]、現校長先生『アンナの赤いオーバー』（ハリエット・ジィーフェルト著）[11)] と、図書館の恒例行事に

なった。毎回150人近い生徒が聞きにくる盛況ぶりである。今では昼休みに来館した生徒がお互いに絵本を読み合ったり、職業体験に保育園や幼稚園に行く生徒が、図書室で読み聞かせの練習をする姿が見られる。

２　特別支援学級で３カ国語を楽しむ

特別支援学級は週に１回読書の時間で図書館を利用し、１学期に１度私が「読み聞かせ」をさせていただいていた。担当教諭、介助員とお話しする機会も多く、その中で介助員の１人に韓国語がとても上手な方がいることを知った。そこでALTに英語、韓国語、日本語で絵本の読み聞かせを授業の導入に行うことを提案してみた。３カ国語で書かれている絵本、『ぐりとぐら』(中川李枝子著)[12]、『３びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン著)[13]など何冊かを、公共図書館で探し出して提供すると、ALTは、わかりやすい物語、単語が教えやすい、ということで『はらぺこあおむし』(エリックカール著)[14]を選んだ。授業の前には、ALTの指導で、読み方、発音、タイミングなど、3人で練習した。

授業では、１ページごとに英語、韓国語、日本の順で読んでいった。韓国語は生徒には聞きなれない言語だが、発音がリズミカルだ。日本語で「おなかはぺっこぺこ」の繰り返しは、韓国語では「チョルルッチョルルッ」。この発音に生徒は大喜び。あおむしが‘洋なし’を食べるあたりから、自然に「I am hungry」「チョルルッチョルルッ」「ぺっこぺこ」と生徒があとを繰り返す。楽しい雰囲気で授業を始めることができた。

環境の変化が苦手な特別支援学級の生徒も、普段身近にお世話をしてくれる介助員が先生として韓国語を話すことで、いつもと違う授業の形態でも問題なく行えた。

さまざまな言語の持つリズムが物語に力を添え、それが生徒の学習意欲に繋がることをこの授業で知ることができた。

Ⅲ　学習情報センターとしての実践

１　手軽にできることから

まずは、図書整理員が１人でもできることに取り組んでみた。

１）勝手にタイアップ

ステップアップの参考にした『学校図書館発　育てます！調べる力・考える力』[4]で紹介されていた、勝手にタイアップ。「とりあえず学校図書館員だけでできることから始めましょう」。教科がやっていることを先生に頼まれたわけではないが、図書館が勝手にタイアップするのだ。今、何の授業を行っているか、先生や生徒に聞いて、関連する資料を展示する。３年社会科の経済、１年国語科「大人になれなかった弟たちに」(光村図書)[15]に合わせた戦争関連の本、３年音楽科の古典芸能など。特設コーナーを作りタイムリーに展示していった。すると「教科書に出てた本だ」「他にもこんな本があるんだ」と手に取る生徒がいる。また、ある単元に関する資料がほとんど図書館に揃っていないこともあった。自校のコレクションの見直しにもなった。

写真２
勝手にタイアップコーナー
3年音楽伝統芸能
2年美術レタリング
1年家庭科食
2年体育ダンスを展示
（上溝中学校）

２）生徒の作品も立派な蔵書

学校内を巡回していると、教室前に生徒の作品が掲示されていることに気づく。こういった作品を先生方に図書館で蔵書として保管させて欲しいと申し出た。許可の出た作品は、現物を展示したり、コピーや、スキャンをして、ファイリングした。国語科の「人物調べ」、「本の帯」、保健委員会の「朝食のすすめ」、美術部「模写」など。

自分の作品が並んでいるのを見た生徒は、少し誇らしげに、友人と工夫したところを話し合う。先輩の作品を見た下級生は、これからの授業イメージを広げたようだった。

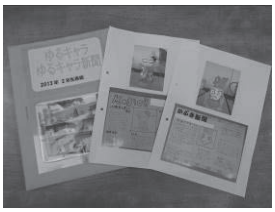

写真３　左：絵画の模写（大野台中学美術部）
右：ゆるキャラ新聞（上溝中学２年美術科）

２　図書館での授業

１）１学年国語科環境調べ

国語科の先生から「未来をひらく微生物」（光村図書）[15]の単元で、環境をテーマに調べたことを１枚にまとめさせたいと、申し出があった。この授業は、２年生でレポートを作成する単元に発展させたいということだった。参考になるような用例はないだろうか、と言われたので、「図書館を使った調べる学習コンクール」[16] で入賞した作品を紹介し、授業の進め方を国語科の先生と話し合った。

生徒が取り組んだテーマは、リサイクル・微生物のはたらき・森林破壊・原子力発電・自然エネルギー・自然災害など。折しも、2011年３月の東日本大震災のすぐ後の授業だったので、震災もテーマに含めた。調べに必要な資料は自館で賄った。震災に関しては、３月11日以降の各新聞（朝日、読売、毎日、神奈川）を使用した。

授業時数は２時間。初めて調べ学習をする生徒は、短絡的に資料を探す。調べたい言葉が書名にないと、本を探すことを諦めてしまう。例えば「風力発電」について調べたいと思うと、『風力発電』と背表紙に書いてある本を探す。そしてそれを見つけ出せないと「調べる本がない！」と訴える。そこでまず「百科事典」「図鑑」などの参考図書を見る、資料は１ページ目から読むのではなく、「目次」「索引」で自分の調べたい言葉を探そう、と声掛けをした。

生徒は必要な情報をノートに書き出し、その情報を整理し、考察や感想をまとめていった（図２）。

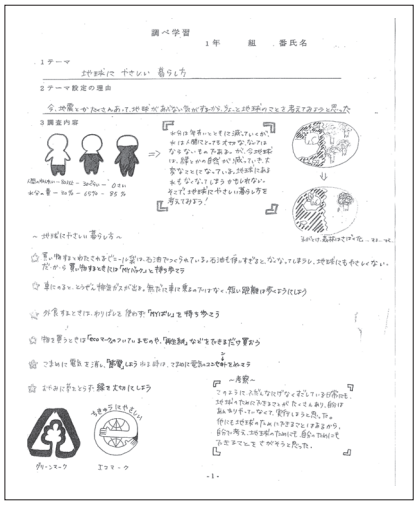

図２　調べ学習「地球にやさしい暮らし方」（大野台中学１年）

震災をテーマに選んだ生徒は、号外のように写真ばかり載せる新聞社と、経済面・スポーツ面など普段とあまり変わらない新聞社があることや、発行される時間によって版番が変わることを学ぶことができた。

２）２年国語科
レポート作成とポスターセッション

①レポート作成

この授業は１年生で行なった調べ学習を発展させ、課題について調べたことを、レポートの形式に沿ってまとめるのがねらいだ。レポートの構成、テーマ決め、資料準備、参考資料の出典の書き方を、『コピーして使える学校図書館活用資料集』（市川市学校図書館教育研究会著）[17] に載っているワークシートや、『学ぶ力をそだてる新図書館シリーズ４　調べたことをまとめよう』（依田逸夫著）[18] を参考に、国語科の先生と打ち合わせた。

図３　「参考文献の書き方、要約と引用について」

テーマは自由（１年で調べたことを深めてもよい)。生徒が決めたテーマをあらかじめ教えてもらい、資料は市立図書館の団体貸出を利用して準備した。授業時数は書き方指導に１時間、調べ、レポート作成に各２時間。参考資料の書き方、要約と引用については、プリントを作成し（図３)、授業の最初に 20 分ほど時間をいただいて、私から説明をした。

１年生で経験を積んでいたので、ほとんどの生徒が順調に資料に当たり、情報を引き出す作業を始めた。しかし、漠然としたテーマで取り組んだ生徒は､先に進めず困っていた。１年の時は「環境」という大テーマが決まっていたが、今回はそのテーマを自分で考えたからだ。そのような生徒に対しては、話し合いをしながらキーワードを書き出し、主題を絞り込んでいった。テーマに関連した本を前にすると、生徒は調べていく道筋がはっきりとしていくようだった。

②ポスターセッションで発表

レポートにまとめたことを､ポスターにし、５分間で発表した。レポート作成の時に丁寧に調べた結果､生徒は自分が伝えたいことを、とても上手にポスターに描いてきた(写真４)。

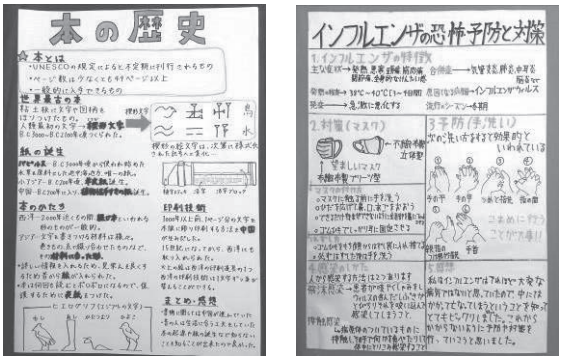

写真４　ポスター作品（大野台中学２年）

教室でのポスターセッションを見学すると、発表者は、調べた結果を相手にわかりやすく説明し、最後に自分の考えや感想を述べていた。質問にもしっかり答えることができた。後日全員のポスターを写真に撮り、図書委員に手伝ってもらって、教室前に掲示した。丁度三者面談の時期だったので、保護者の方にも見ていただくことができた。

Ⅳ　成果と課題

１　成果（変化）

１）委員会活動の活発化

先生方が読み聞かせをしてくださったことをきっかけに、図書館でさまざまなイベントが行われるようになり、委員会活動がとても活発になった。夏休み・冬休み貸出、秋の読書旬間でのイベント企画を委員自ら提案するようになった｡図書館のマスコットを発案し、全校生徒に名前を公募。そのマスコットを使った宣伝活動を行い、栞やブックカバーを作って、来館者にプレゼントした（写真５)。以前は委員会の担当顧問や図書整理員がイベント前に「何かやる？」「どうする？」と委員に聞いていたが、委員長から「この企画をやり

たいので、許可してください」と相談にやってきた。こういった活発な委員会の活動は、「図書館では何か面白いことが行われている」という波となって学校に広がっていった。

写真５　左：図書委員会マスコット「ブックマ」の季節展示
右：読書旬間にプレゼントしたブックマをデザインしたブックカバー
（大野台中学校）

２）統計

中学では、本好きの限られた生徒が図書館を利用する傾向があるが、委員会の活発化、授業の利用で、普段それほど図書館を利用しない生徒も図書館に足を運ぶようになった。それは数字を見てもわかる（図４）。

貸出冊数、貸出者率（貸出者数／全校生徒数）とも右肩あがりを示している。全国学校図書館協議会の調査結果[19]では、2012 年５月１か月平均読書冊数が中学生は平均 4.1 冊。大野台中学校では 2010 年 2.6 冊、2011 年 4.3 冊、2012 年 7.5 冊と推移し、全国平均より高い平均読書冊数となった。

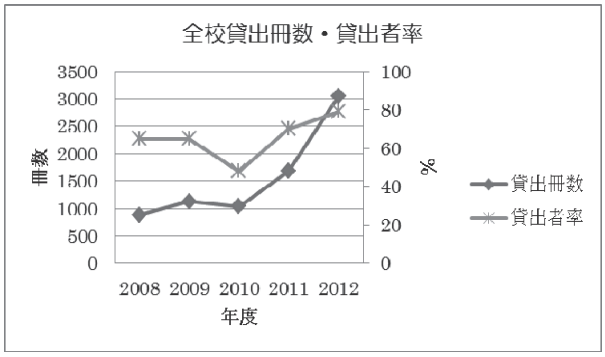

図４　全校貸出冊数・貸出者率
（大野台中学校）

また、文学だけでなく、歴史、理科、工業、芸術など幅広い分野で、本を借りているというデータもとれた。調べ学習で資料を探しながら、図書館をウロウロすることで、「こんな本もあった！」という発見が多かった結果だろう。

２　課題

１）学校全体での図書館利用

成果として、全体の貸出冊数などが増加したと述べたが、この結果を 2012 年の学年ごとのグラフにすると、図書館を活用した２学年の増加が顕著であることがわかる（図５）。

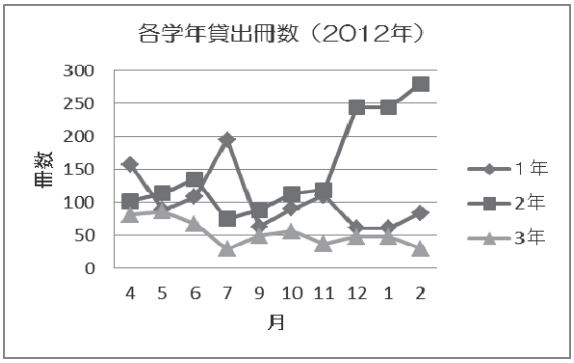

図５　2012 年各学年貸出冊数の推移
（大野台中学校）

図書館をよく使ってくださる先生がいる学年の生徒は、図書館に普通に来館し、普通に利用できる。「普通に利用」というのは、資料が書棚のどこにあるか、欲しい資料をどのように探せばよいか、困った時は誰に相談すればよいのかといった、図書館の基本的な利用方法のことである。入学時に図書館利用のオリエンテーションを１時間行うが、それ以降１度も図書館を訪れない生徒も多い。

図書館がもっと身近で便利だと感じてもらえれば、多くの生徒や教科が利用するようになるだろう。そのためにどうすればよいかは、次の課題だ。

２）図書整理員のスキルアップ

授業で図書館を使う際、図書整理員は学習目標を先生と共有していないと、正しい資料提供ができない。私は外部の研修会で次のような事例を学んだ[20]。

先生が「ヤモリとイモリを比較してみよう」という調べ学習から最終的に「絶滅」というキーワードで「環境問題に関するテーマのポスターを描く」という授業を組み立てるとする。事前に先生と打ち合わせをしておかないと、突然生徒が図書館に来館し、「ヤモリとイモリの違いが書いてある本はない？」と尋ねられれば、整理員は２種の違いのみが書かれている『ヤモリ　育てて、しらべる日本の生きものずかん 10』（集英社）[21] を渡す。

けれど、先生の意図はヤモリとイモリをそれぞれ調べ、「絶滅危惧種」という共通のキーワードを生徒に気づいてもらい、そこから調べを発展させたいのだから、整理員はヤモリ、イモリが記載されている百科辞典や図鑑などの参考資料を提供すべきだ。

はじめに書いた到達段階の③までは、基本的な司書の知識があれば良いが、図書館のステップアップを望むなら、学校図書館の専門的な知識と経験が必要になってくる。これからも研鑽を積んでいかなくてならない。

３）居場所としての図書館

図書館は読書を楽しんだり、授業で利用する場だけではない。「今はちょっと教室にいたくない」という生徒がフラッと昼休みや放課後に訪れる場でもある。楽しいイベントを企画し、多くの子どもたちが来館するようになって、ある生徒が「なんか居心地が悪くなった」と私にこぼしたことがあった。自分の居場所として図書館を頼りにする生徒もいる。そういった生徒への対応は、担任、図書館担当の先生方、カウンセラーとよく話し合っていかなくてはならない。読書センター、学習情報センター、そして子どもたちの居場所としての図書館。そのバランスを取るのは難しい。

Ⅳ　まとめ

１　図書館は生徒とともに成長する

活発な図書委員会活動や、授業で図書館を活用するようになって、図書館がいきいきとしてきた。

生徒は個人個人によって興味、関心が異なる。個人に即した的確な資料を揃え、提供していく中で、その学校特有のコレクションが構築されてゆく。また、学校ごとに図書館運営方針は違ってくる。司書教諭と一緒に方針に基づいた図書館づくりも必須だ。

図書館学者、ランガナタンは図書館学五法則の中で、「図書館は成長する有機体である」と述べている。まさに生徒や先生に活用されて初めて、図書館は成長するのだ。

２　これから

全国の学校図書館は地域格差が大きいのが現状だ[22]。図書館に人がいなくて、古い本がそのまま並んでいるという学校も少なくない。一方、冒頭で紹介した島根県は、学校図書館の充実が目覚しく、先進的な事例も多く紹介されている。さらに、現在、学校司書法制化の動きもあり、文部科学省で協議中だ。

相模原市では藤野小学校、鵜野森中学校が、「子どもの読書活動優秀実践校」として文部科学大臣表彰を受けた。市内の学校図書館は確実に整備されてきている。厳しい勤務条件だが、図書整理員ができることはまだまだある。

今回の実践をまとめたことで、改めて原点に戻り、図書館の質を上げる重要性を感じた。貸出冊数が延び、ただ楽しい図書館で甘んじていてはいけない。

書棚の前に生徒が立った時に、わくわくする本がそこにある。新しい情報・メディアが揃っている。時事・季節に合った掲示・展示がされている。広報活動がいつも行われている。先生が授業で使いたいと思った資料を用意できる。すべての条件が整った時に、図書館機能の到達点⑤⑥に挑めるのだろう。

最後に、私が幸せなのは、図書館に理解を示し、協力してくださる先生方の下で勤務で

きることだ。この環境がなければ多くの実践はできなかった。貴重な経験を活かして、さらなる上を目指した図書館づくりにこれからも貢献していきたい。

《引用文献、参考文献》

１）公益財団法人文字・活字文化推進機構、公益社団法人全国学校図書館協議会、学校図書館整備推進会議『資料集子どもの読書推進 学校図書館の整備充実に向けて』2012 年

２）文部科学省『中学校学習指導要領』2009 年

３）学校図書館問題研究会兵庫支部編「授業を支える司書づくり」『がくと　vol.27』、2011 年、p108

４）遊佐幸枝著『学校図書館発　育てます！調べる力・考える力』少年写真新聞社、2011 年

５）遊佐幸枝著『学校図書館発育てます！調べる力・考える力』少年写真新聞社、2011 年、p15

６）伊勢英子著『ルリユールおじさん』理論社、2006 年。

７）公益社団法人全国学校図書館協議会「第 59 回学校読書調査報告」『学校図書館』No.757、2013 年、p34

８）ユージン・トリビサス著『３びきのかわいいオオカミ』冨山房、1994 年

９）いとうひろし著『だいじょうぶだいじょうぶ』講談社、1995 年

10）中川李枝子著『そらいろのたね』福音館書店、1967 年

英語版、ラボ教育センター、2004 年

11）ハリエット・ジィーフェルト著『アンナの赤いオーバー』評論社、1990 年

12）中川李枝子、山脇百合子著『ぐりとぐら』英語版、福音館書店、2003 年

13）マーシャ・ブラウン著『３びきのやぎのがらがらどん』英語版、ラボ教育センター、1999 年

14）エリックカール著『はらぺこあおむし』偕成社、1976 年

英語版、Philomel、1994 年

韓国語版、 トクンカンポニ、2007 年

15）『国語１』光村図書出版株式会社、2010 年

16）図書館振興財団「1 枚で、私ならこうまとめる」『あうる』No103、2011 年、p12～15

17）市川市学校図書館教育研究会著『コピーして使える学校図書館活用資料集』エルアイユー、2004 年

18）依田逸夫著『学ぶ力をそだてる新図書館シリーズ４　調べたことをまとめよう』ポプラ社、2001 年

19）公益社団法人全国学校図書館協議会「第 59 回学校読書調査報告」『学校図書館』No.757、2013 年、p13

20）全国 SLA サポート講座 2013.5.18「探究学習のためのスキルワーク」国士舘大学桑田てるみ

21）疋田努著『ヤモリ　育てて、しらべる日本の生きものずかん 10』集英社、2006 年

22）公益社団法人全国学校図書館協議会「第 59 回学校読書調査報告」『学校図書館』No.757、2013 年、p41